

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
84	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉3.使用後の注意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 保管場所については次の事項に注意すること。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 水のかからない場所に保管すること。 ・ 気圧、温度、湿度、風通し、日光、ほこり、塩分、イオウ分を含んだ空気などにより悪影響の生ずるおそれのない場所に保管すること。 ・ 傾斜、振動、衝撃（運搬時を含む。）など安定状態に注意すること。 ・ 化学薬品の保管場所やガスの発生する場所に設置しないこと。 				
85	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 機器が故障したときは勝手にいじらず、故障である旨の適切な表示を行い、修理は専門家に任せること。 				

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
86	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 機器は勝手に改造しないこと。 				<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉一般注意</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 取り外し、改変、無効化などにより、この装置または検査室に搭載されている安全装置の機能を妨げないこと。安全装置への影響により、オペレータや患者が致命傷や重傷を負うおそれがある。 <p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉電気的安全性</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ この装置のカバーまたはケーブルは取り外さないこと。この装置の内部で危険な高電圧が発生している。カバーやケーブルを取り外すと、オペレータや患者が致命傷や重傷を負うおそれがある。 ▪ カバー、ケーブル、部品を取り外すことができるのは、有資格の認定されたサービス技術者だけである。 <p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉機械的安全性</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 患者台のカバーを取り外さないこと。患者台には可動部品があり、カバーを取り外すとオペレータや患者が致命傷や重傷を負うおそれがある。

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
87	<p>【貯蔵・保管方法及び使用期間等】 耐用期間</p> <ul style="list-style-type: none"> 本装置の耐用年数は、正規の保守点検を実施した場合に限り、納入時より 10 年とする。[自己認証(当社データによる)] 	<p>【貯蔵・保管方法及び使用期間等】</p> <ul style="list-style-type: none"> 本装置の使用耐用期間は、正規の保守点検を行った場合に限り 10 年間です。[自己認証(当社データによる)] これを超えてご使用の場合は当社サービスセンターまでご連絡ください。尚、耐用期間途中であっても定期交換部品は交換が必要です。 	<p>【貯蔵・保管方法及び使用期間等】 1) 使用耐用年数 (自主基準)</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定された保守点検を実施した場合に 10 年ただし、これは推奨された環境で使われた場合で、使用状況により差異が生じることがある。 	<p>【貯蔵・保管方法及び使用期間等】 2.耐用期間</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定された保守点検を実施した場合に 10 年です。[自己認証(当社データによる)] (ただし、使用状態により差異があるため個別に定める場合はこれを優先します。) なお、耐用期間内においても次の部品は交換が必要です。 <ul style="list-style-type: none"> 定期交換部品 故障部品また、装置を構成する部品の中には一般市販部品もあり、製品のモデルチェンジが速く、耐用期間内であってもサービスパーツを供給できなくなる場合もあります。この場合は、あらかじめ情報を提供するとともに対応策を提示致します。 	<p>【貯蔵・保管方法及び使用期間等】 耐用期間</p> <ul style="list-style-type: none"> 10 年 (自主基準、指定された保守点検を実施した場合) ただし、使用状況により差異が生じることがある。 なお、耐用期間内においても定期交換部品の他、次の部品については交換が必要な場合がある、 <ul style="list-style-type: none"> 消耗部品 故障部品 突発的な部品故障 著しい磨耗・劣化・破損などが生じた部品など また、装置を構成する部品の中には一般市販部品もあり、耐用期間内であってもサービスパーツとして供給できなくなる場合もある。
88			<p>【使用上の注意〈警告〉 2) 使用上の警告</p> <ul style="list-style-type: none"> 誘導コード、中継コードが破損した場合は、弊社サービスに連絡のこと。 誘導コード、中継コードは絶縁物が擦り減ったり、金属面がむき出しになっている場合は、使用しないこと。 	<p>【使用上の注意】〈その他の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> コイルは専用の保管棚に保管し、直接床には置かないこと。 <p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉 消耗部品</p> <ul style="list-style-type: none"> 無線脈波・呼吸同期パッケージのグリップ各種は消耗品です。詳しくはオプションの取扱説明書 (2B972-045JA) 第 13 章 13.2「消耗品」を参照してください。 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉 一般注意</p> <ul style="list-style-type: none"> 装置またはシステムの一部に異常または調整不良がみとめられる (または疑われる) 場合は、修理が終わるまで絶対に使用しないこと。オペレータや患者が致命傷や重傷を負うおそれがある。また、誤診にもつながるおそれもある。 <p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉 一般注意</p> <ul style="list-style-type: none"> 破損したサーフェイスコイルやケーブルトラップ、ケーブルは絶対に使用しないこと。システムの送信中に高電圧がケーブルを通過するため、破損したケーブルやコネクタを使用すると危険である。鋭利な先端部が患者の皮膚に触れると、患者が負傷するおそれがある。

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
89			<p>【保守・点検に係る事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ カバーを外して装置の内部に触れると感電や駆動部分に接触してケガをする可能性があるため、ネジで固定されているカバーを取り外さないこと。 ▪ この装置は、防水型ではないため、装置や設置されている部屋の清掃の際に水やその他の液体が装置内部に侵入しないように注意すること。 ▪ ガントリは高磁場 1.5T (15000Gauss) を発生している。磁性体の工具、測定器、清掃用具、及び運搬機器を撮像室へ持ち込まないようにすること。 <p><u>精密機器及び電子機器は磁気の影響で、故障、またはデータが消失する恐れがある。</u></p>		<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉 一般注意</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ユーザーによる定期確認に合格し、最新の定期保守点検プログラムが実施済みであることを確認しない限り、本システムをいかなる用途にも使用しないこと。 <p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉 一般注意</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 適切なトレーニングを受けていない方がシステムの変更や修理を行う場合は、当社の保証が無効になることがある。複雑な技術装置を扱うときの常として、資格のない方が保守を行うと、システムが破損したり、オペレータや患者が負傷するおそれが大きくなる。不適切な使用、ならびに当社の認定するサービス担当者以外の人物によるメンテナンス、修理、損傷、変更などの結果として生じた故障の責任は、すべて製品の使用者が負うものとする。 <p>【保守・点検に係る事項】</p> <p>本装置には、正しい操作とともに、使用者および業者による定期保守点検が必要になる。安全性、有効性および信頼性を維持するために不可欠であるので、推奨期間ごとに次に示す保守点検を行うこと。</p>

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
90			<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉受信コイル、ケーブル、リード線使用上の注意</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 受信コイルの清掃には中性洗剤を使用すること。ただし、信号コネクタ部分には液を付けないよう注意すること。 		<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉 一般注意</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ クリーニングと消毒は、適切なトレーニングを受けた方のみ行うことができる。 ▪ 院内感染を避けるため、(負傷した)患者の検査後は、必ず患者台天板、RF コイル、およびケーブルをクリーニング、消毒すること。患者台天板、RF コイル、およびケーブルが汚染されているおそれがある。 ▪ 装置のクリーニングや消毒時はいつも保護眼鏡と手袋を使用すること。 <p>【保守・点検に係る事項】 クリーニングと消毒</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ システムやコンポーネント、アクセサリのクリーニングと消毒を行う前に、取扱説明書の警告と禁忌の項を良く読み理解しておくこと。 ▪ 液体をこぼしたらすぐにふき取ること。 ▪ システムに水や他の液体などが浸入しないようにすること。 ▪ システムまたはシステム部品の電源が OFF になっている場合を除き、コントロールパネルおよびコネクタなどの電子部品を、洗浄剤に浸した布または湿らせた布を使用してクリーニングしないこと。 ▪ 検査を開始する前に、システムのすべての部分、コイル、アクセサリが完全に乾燥していることを確認すること。 ▪ 血液や造影剤による汚染を除去する際は、適切な个人防护と事前準備を講じること。 ▪ 以下、省略

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
91	<p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 機器及び部品は必ず定期点検を行うこと。 ▪ しばらく使用しなかった機器を再使用するときには、使用前に必ず機器が正常かつ安全に作動することを確認すること。 ▪ 前述のマグネットクエンチの記述にあるように、設置時の仕様（設置計画書）に基づき下記の内容を定期的に確認すること。 <ul style="list-style-type: none"> ・ヘリウム排気系統（排気管、大気開放口（排気口））の確認 ・強制排気装置の動作・検査室の強制排気口の電波シールド網（ハニカム網）の目詰まり除去 ・酸素濃度計（モニター）の動作 ・酸素濃度計（モニター）と強制排気装置の連動使用者による保守点検事項の詳細については、装置付属のMR安全ガイド「保守サービススケジュール」を参照すること。 	<p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 始業前点検・終了点検・定期点検は必ず行ってください。内容については、装置付属の取扱説明書を参照してください。尚、使用者自ら定期点検ができない場合は、当社サービス部が受託することができますので、詳細は当社サービスセンターへお問い合わせください。 <p>【使用上の注意】〈その他の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 主磁石の液体ヘリウムの量は使用の有無にかかわらず、定期的に残量が十分であることを確認してください。十分でない場合は、当社サービスセンターへ連絡し必ず補充してください。又、ヘリウムの残量が十分ではない場合（ヘリウムについての警告が表示されている場合）には撮影を控えてください。 	<p>【使用上の注意〈警告〉 2) 使用上の警告</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 絶縁部が擦り減ったり、金属面がむき出しになっているコイル、ケーブル、リード線などは絶対使用しないこと。 ▪ スキャンを開始する前に、ガントリ内から不必要な物（コイル、ケーブル、リード線など）を除去すること。 ▪ ケーブルとリード線は取扱説明書どおりに接続、配線がされているかどうかを確かめること。また、ガントリ内ではループが形成されないようにし、被検者に直接接触しないようにすること。 		<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉液体ヘリウムに関する安全性</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 液体ヘリウム容器が非磁性体であること、またはマグネットの磁場が発生していないことが分かっている限り、いかなる状況下でも液体ヘリウム容器をマグネットの近くに持ち込まないこと。検査室に磁性体または鉄製品を持ち込むことは、患者またはその他の人および装置にとって非常に危険である。必ず液体ヘリウム供給元が用意した特殊な非磁性体容器を使用し、非磁性であることを示す適切なラベルを付けること。 ▪ いかなる状況下でも、ヘリウム排気システムの据え付け前に液体ヘリウムをマグネットに注入しないこと。 ▪ 液体ヘリウムの注入は訓練を受けた認定者が行うこと。 ▪ 液体ヘリウムは超低温で、人体の組織に凍傷を生じるおそれがある。必ず保護手袋を着用すること。凍傷を生じた場合は水で洗い流し、やけどとして治療を行うこと。 ▪ 蒸発したヘリウムにより空気中の酸素が希薄になり、窒息の危険がある。検査室および液体ガスの保管室を常に十分換気すること。 ▪ 液体ヘリウムが誤って検査室内に放出されると、液体酸素の蓄積を生じて、火災の危険がある。

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
92	<p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 表：省略（項目、点検頻度、点検内容） 		<p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 始業点検 表：省略（点検内容、処置方法） 使用後の点検 表：省略（点検内容、処置方法） 	<p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉 始業点検</p> <ul style="list-style-type: none"> 室内の温度・湿度の確認指定された温度・湿度の範囲内であることを確認します。 酸素モニタの動作確認撮影室内の酸素濃度、酸素モニタの動作を確認。 使用する RF コイルの外観チェックケーブルの被覆の破れ、金属部の露出を確認します。 装置及び設備の確認装置及び設備に異常がないことを確認します。 システムリポートシステムをリポートします。 液体ヘリウム量の確認磁石の液体ヘリウム残量を確認します。 各キャビネットの冷却ファンの確認各キャビネットの冷却ファンの動作を確認します。 ペーシェントコールの点検ペーシェントコールを押してブザーが鳴ることを確認します。 患者モニタシステムの点検患者モニタが正常に動作することを確認します。 ファントムでの S/N 測定ファントムを用いて信号ノイズ比 (S/N) を測定します。 <p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉 終業点検</p> <ul style="list-style-type: none"> RF コイル、ファントムの片付け所定の場所へ戻します。 寝台天板を確実に引き出して、最も低い位置まで下げます。 装置および空調設備の確認電源オフしません。正常動作を確認します。 以下、省略 	<p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 表：省略（点検項目、点検頻度、点検内容）

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
93	<p>【保守・点検に係る事項】〈企業による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 定期保守点検は必ず行うこと。装置を長く安全にお使い頂くために、保守契約をお薦めいたします。業者による保守点検事項の詳細については、装置付属の取扱説明書を参照すること。 	<p>【保守・点検に係る事項】〈企業による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 業者による保守点検事項の内容については、装置付属の点検報告書を参照してください。 	<p>【保守・点検に係る事項】〈企業による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 本装置の定期的な保守点検は安全及び装置の保護の観点から訓練を受けた業者（サービス員）が行う必要がある。・点検事項とその周期については、弊社または弊社の指定する業者に相談のこと・詳細については、装置付属の取扱説明書（機器概要、安全編）の第5章保守点検を参照のこと。 	<p>【保守・点検に係る事項】〈企業による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 専門技術が必要ですので、サービスエンジニアにご依頼ください。 定期点検：製品の安全性・性能を維持するために、3か月ごと、6か月ごと、1年ごと等の定期点検をサービスエンジニアにご依頼ください。詳しくは装置の取扱説明書（2B900-428JA、2B900-322JA又は2B900-335JA）第3章3.2「定期点検」を参照してください。 	
94	<p>【貯蔵・保管方法及び使用期間等】</p> <p>定期交換部品</p> <ul style="list-style-type: none"> 定期的な保守、メンテナンスを行った状況で、定期的な交換の必要がある。 表：省略（品目、交換頻度） 注）交換頻度は参考値であり、上記の期間を保証するものではない。これらの部品は、使用環境、使用状況などにより、上記の期間の範囲を超える（短い）場合もある。 <p>【貯蔵・保管方法及び使用期間等】</p> <p>その他の交換推奨部品</p> <ul style="list-style-type: none"> 表示モニター HDD 各種ドライブ キーボード、マウス 各種データ保持用バッテリー（電池）、又はそのバッテリー（電池）を含んだモジュール 冷凍機用コンプレッサー 以下、省略 		<p>【貯蔵・保管方法及び使用期間等】</p> <p>2) 定期交換部品</p> <ul style="list-style-type: none"> 表：省略（部位、名称、期間） モニターは5年程度、磁気ディスク等のコンピューター部品は3年程度の有寿命部品である。 装置構成部品の中には一般市販部品もあり、モデルチェンジ等で生産が中止される理由から耐用年数期間内であっても、サービスパーツを供給できなくなる場合もある。この場合は、あらかじめ情報を提供するとともに、対応策を提示することとする。 	<p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉 定期交換部品</p> <ul style="list-style-type: none"> ランプ類 冷凍機コールドヘッド 冷凍機アドソーバ 液体ヘリウム（ただし、撮影条件、スルーブットに依存します） バッテリー類：無停電電源本体、RM基板内バッテリー、緊急遮断ユニット内バッテリー、酸素モニタ内バッテリー、無線同期送信機内バッテリー ペーシェントコール（握る部分が緑色の場合） 酸素モニタ 患者固定具／マット類 真空ポンプ用ダイヤフラム 真空ポンプ用ベアリング 定期交換部品の詳細ならびに交換期間については、取扱説明書の第3章「保守点検」を参照してください。 	<p>【保守・点検に係る事項】〈使用者による保守・点検〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 表：省略（点検項目、点検頻度、主な点検内容） 液体ヘリウムの充填は、弊社サービスへ問い合わせること。 装置を長く安全にお使い頂くために、保守契約を推奨する。 詳細はサービスマニュアルを参照するとともに、弊社サービスへ問い合わせること。 なお、詳細は装置付属の取扱説明書を参照のこと。

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D	製品 E
95	<p>【使用上の注意】〈その他の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■本装置を廃棄する場合は、産業廃棄物となり、必ず地方自治体の条例・規則に従い、許可を得た産業廃棄物処分業者へ廃棄を依頼すること。 	<p>【使用上の注意】〈その他の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■本装置を廃棄する場合は、廃棄物処理に関する法律に従い適切に処理してください。 ■装置の廃棄等により、磁場を消失させる必要がある場合は安全のため当社サービスセンターへご連絡ください。 	<p>【使用上の注意】〈その他の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■この装置を廃棄する場合は、産業廃棄物となり、必ず地方自治体の条例・規則に従い、許可を得た産業廃棄物処分業者に廃棄を依頼すること。また磁気回路は危険な場合があるため、磁気回路を処分する場合は、弊社または弊社指定代理店に連絡のこと。 	<p>【使用上の注意】〈その他の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■装置、および組合せ製品を廃棄する場合は、最寄りのサービスセンタに問い合わせること。 	<p>【使用上の注意】〈その他の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■この装置を廃棄する場合は、産業廃棄物となり、必ず地方自治体の条例・規則に従い、許可を得た産業廃棄物処分業者に廃棄を依頼すること。

別 添 7

気管切開チューブ添付文書（現行） 各製品の記載内容の比較

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
1	<p>【警告】〈使用方法（共通）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 本品を他の本品と接続する場合は、接続部が確実に接続されていること、閉塞やリークなどが生じていないことを、接続時および使用時に確認すること〔閉塞やリークにより、呼吸に障害が生じる可能性があるため〕。 <p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 人工呼吸器または麻酔用のチューブ・コネクタ関連：インナーカニューレに装着する時または装着している状態の時、インナーカニューレが外れたり、気管切開チューブが破損したりしないように、チューブやコネクタに過度の回転力や直線的な力をかけないこと。 人工呼吸器または麻酔用のチューブ・コネクタ関連：本品を麻酔器や人工呼吸器等に接続する際は、十分に注意を払い、本品に無理な力が加わらないようにし、チューブに異常が認められた場合は、ただちに交換すること。 	<p>【警告】〈併用医療機器〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 本品を他の呼吸管理器具と接続して使用する場合には、呼吸管理器具のチューブとの接続が完全かどうかを確認し、十分な観察、管理を行うこと。〔接続が不完全だと呼吸困難等がおこる可能性があるため。〕 <p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 人工呼吸器等と接続するときは、確実に接続されていることを確認すること。また、過度の回転力や直線力や振動するような力をかけないこと。〔接続が外れる恐れがあるため。〕 	<p>【警告】〈併用医療機器〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 呼吸回路を本品のコネクタに接続時及び接続後に、直線的又は回転的な過剰な力が本品にかからないよう注意すること〔偶発的に呼吸回路との接続が外れたり、チューブ又は呼吸回路の閉塞、チューブが気道から逸脱する原因となるため〕。 <p>【使用上の注意】〈相互作用〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 呼吸回路との接続時、及び使用中も回路との接続が確実であることを確認すること。各接続部でリークや閉塞等がないことを確認すること。 	<p>【警告】</p> <ul style="list-style-type: none"> 本品を他の呼吸管理器具（呼吸回路など）と接続する場合は確実に接続されていること（リーク、閉塞、接続が緩いなどの問題がないこと）を確認し、使用中も十分な管理、観察を行うこと。〔接続が不完全な場合呼吸困難などを引き起こすことがあるため〕 特にコルゲート内カニューレを併用した状態で15mmめすコネクタと接続する場合には注意すること。〔ある種の15mmめすコネクタは内腔の奥行きが足りないため接続時に十分な強度が得られないことがあるため〕 <p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 呼吸回路との接続時や接続中は、呼吸回路を無理にねじったり引っ張ったり、折り曲げたりしないこと。〔呼吸回路の外れやカニューレが閉塞することがあるため〕
2				<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 呼吸回路や人工鼻（HME）などと接続する場合は、15mmコネクタに付着した水分及び分泌物を取り除くこと。〔水分及び分泌物が付着していると15mm円すい接合が外れ易くなる可能性があるため〕
3				<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 呼吸回路と接続する場合は、回転コネクタを使用すること。〔切開口への負荷を低減するため〕
4	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ISO5356-1に適合した15mmコネクタが装備されている機器だけを使用すること。 			

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
5		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 綿テープ等と頸との隙間が1指あるいは2指程度となるように調整すること。[過剰な隙間は、本体が気管切開孔から浮き上がり気管内腔の適切な位置よりずれる恐れがあるため。] 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 本品が適切な位置に挿管されていることを確認すること。ネックテープ又はチューブホルダを使用して本品を固定している場合は、挿管直後に限らず適時、本品とネックテープ又はチューブホルダが緩まないよう適切に固定されていることを注意・確認すること [ネックテープやチューブホルダがほどける、又は緩むことにより、予期せぬ抜管の恐れがあるため]。 	
6	<p>【警告】〈使用方法（共通）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 気管切開術後においては、皮膚から気管へのルートが確立していないためチューブの再挿管が困難となる場合があるので、チューブが抜けないようにしっかりと固定できるような処置を講じること。チューブが抜け再挿管する場合、皮下へ異所留置するおそれがあるので、再挿管後に換気状態の確認を十分に行なうこと。また、再挿管時等、気道が確保できない場合に備えて、緊急気管挿管等の準備を整えておくこと。 	<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 気管切開術後においては、皮膚から気管へのルートが確立していないため本品の再挿管が困難となる場合があるので、本品が抜けないようにしっかりと固定すること。なお、再挿管する場合に皮下へ異所留置する恐れがあるので、再挿管後に換気状態の確認を十分に行なうこと。又、再挿管時等、気道が確保できない場合に備えて、緊急気管挿管等の準備を整えておくこと。 	<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 気管切開術後においては、皮膚から気管へのルートが確立していないため、チューブの再挿管が困難となる場合があるので、チューブが抜けないようにしっかりと固定できるような処置を講じること。チューブが抜け再挿管する場合、皮下へ異所留置する恐れがあるので、再挿管後に換気状態の確認を十分に行うこと。又、再挿管時等、気道が確保できない場合に備えて、緊急気管挿管等の準備を整えておくこと。 	<p>【警告】</p> <ul style="list-style-type: none"> 気管切開術後においては、皮膚から気管へのルートが確立していないため気管切開チューブの再挿管が困難となる場合があるのでチューブが抜けないようにしっかりと固定できるような処置を講じること。気管切開チューブを再挿管する場合、皮下への異所留置するおそれがあるので、再挿管後に換気状態の確認を十分に行うこと。また、再挿管時など、気道が確保できない場合に備えて、緊急挿管等の準備を整えておくこと。
7				<p>【警告】</p> <ul style="list-style-type: none"> 窓付の気管切開チューブを挿管した直後および留置中も、肉芽、分泌物、気管壁との接触、皮下組織などによってカニューレや窓が閉塞することがないように、定期的に窓の位置と窓が常に開放状態にあることを、患者の換気状態または胸部X線撮影（側面）や気管支ファイバーなどの機器で確認すること。[換気不全に陥る危険性があるため]
8		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 収縮時のカフの厚みも考慮に入れること。[気管切開孔に挿入しにくい時があるため。] 		
9	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 各タイプおよび各寸法の構成部品は、それぞれ専用であるため、他のタイプおよび寸法のものを使用しないこと（シングルユースインナーカニューレは、サイズとカタログ番号が同じものとのみ交換が可能）。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 他社製品から本品への移行時には呼称及び表示の差異に注意すること。[本品は、外径呼称だが、他社製品は内径呼称が多いため。] 		

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
10	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> チューブ選択の際は、十分な臨床的判断に基づき、各患者に適したサイズのチューブを選択すること。気道の長さなどの解剖学的個体差を考慮し、臨床的に十分注意して判断すること。 		<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 最も適切なチューブのサイズを選択するために、気管切開孔のサイズ、気管切開チューブの外径、カフの厚みを考慮すること[全体の外径が大きすぎるサイズを選択した場合には、挿管困難、不適切な部位への誤留置、気管壁のねじれ等を引き起こす危険性があるため]。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 気管内径に適したサイズの気管切開チューブを使用すること。特に気管が拡張している症例には、推奨範囲のカフ圧でシールできるように標準より大きなサイズを使用する、または気管内のカフのシール位置（たとえば同じカニューレでカフの位置が違うタイプ）を変えるなどを検討すること。[気管内径に対して小さすぎるカフを使用すると、シールするためにはカフを過剰に膨らませなければならない。逆に大きすぎるカフを使用するとカフ内圧を推奨範囲に設定してもカフに大きなシワが発生し適切にシールできないことがある（カフのシワからガスがリークする）ため。また、カフ上部に溜まった分泌物などがシワから肺にたれ込む恐れがあるため] 本品のカフは大容量・低圧タイプでカフ内圧の推奨範囲は 27～33hPa（20～25mmHg）である。
11			<p>【禁忌・禁止】〈適用対象（患者）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 上気道に解剖学的構造又は病理学上異常のある患者 [気道が部分的又は完全に閉塞する恐れがあるため]。 	
12			<p>【禁忌・禁止】〈併用医療機器〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 本品にデカニュレーションキャップ又はオレタースピーキングバルブを使用しないこと。[デカニュレーションキャップ又はオレタースピーキングバルブは孔開き気管切開チューブにのみ使用できるため]。 	

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
13				<p>【禁忌・禁止】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ キャップT及びメラスピーチバルブT、T O 2は、上部気道に閉塞等の異常がある患者には使用しないこと。[呼吸を十分に排気できなくなることがあるため（図6参照）] ■ また、意識が明瞭で治療に協力的な患者にのみ使用すること。[シーツなどで一方弁が閉塞されることがあるため] ■ さらに、体の動きが弱い患者（たとえば筋ジストロフィー症など）および小児に対しては医師の監視下で使用すること。[分泌物が窓に詰まる、窓が皮下組織に埋まるなどして気道が閉塞しても自分でキャップT及びメラスピーチバルブT、T O 2を外せないことがあるため]
14	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ パッケージの密閉性に問題のある場合は使用しないこと。必ず使用前に、パッケージおよび本品（接合部やチューブなど）に亀裂、破損がないか確認すること。異常が認められた場合は、本品を使用しないこと。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本品の包装が破損していたり、濡れていた場合には、使用しないこと。[滅菌状態が保たれていない恐れがあるため。] 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 開封前に包装状態をよく点検し、破損、汚染、水濡れ等のあるものは使用しないこと。 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本品の滅菌袋に破れ、汚れなど異常がある場合は使用しないこと。
15		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 外観上異常がないことを確認し、異常のあるものは使用しないこと。 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 開封後、本品に外観上異常がないことを確認し、異常のあるものは使用しないこと。 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 滅菌袋から本品を取り出したときは、本品の外観に異常がないことを確認してから使用すること。
16	<p>【警告】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 必ず使用前にカフやパイロットバルブ、バルブをテストすること。本品に何らかの機能不良が認められた場合は使用しないこと [機能不良（特にカフ）を放置したまま使用すると、患者の傷害や死を招く恐れがあるため]。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リドカイン噴霧剤（例：キシロカインポンプスプレー）は使用しないこと。[製剤の添加物により、カフの破損（ピンホールの発生）やマーキングが消失することがあるため。] 	<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 挿管前にカフに空気を注入して、3～4 kPa（30～40cmH₂O）にカフ内圧が維持されることを確認すること。カフインフレーションライン、パイロットバルブ、一方弁等に損傷のないことを確認すること [機能不良を放置したまま使用すると換気不全の原因となるため]。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ シリンジを用いて所定量の空気を注入しカフを膨張させ数分間収縮しないことを確認する。または、無菌の生理食塩水に浸漬し連続した気泡の発生がないことを確認する。（所定量：【形状・構造等及び原理】4. 寸法等の表で示す空気注入量）
17	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 注意：潤滑剤がチューブ内部に入り込み、換気を妨げないようにすること。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 過剰に塗布した潤滑剤は、拭き取ること。[本体内腔に入り込み換気の妨げとなる恐れがあるため。] 	<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本品の挿管前に潤滑剤を塗布する場合は、チューブ内腔が詰まったり、膜ができていないことを確認すること [潤滑剤のつけすぎにより、部分的又は完全にサクションラインやチューブ内腔を閉塞させ換気を阻害する恐れがあるため]。使用に際しては潤滑剤の取扱説明書に従うこと。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 潤滑剤でカニューレの内腔を閉塞しないこと。[気道を確保できないことがあるため]

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
18			<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 挿管直後に、カフ上部に開口するサクシオンポートが気管傍組織内にあることを確認すること [サクシオンポートが気管内に開口していない場合、正しく吸引が行えない恐れがあるため]。 	
19	<p>【警告】〈使用方法（カフ関連）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフが完全に機能しているか定期的にモニタリングし、カフ圧を調整すること。 			<p>【警告】</p> <ul style="list-style-type: none"> 挿管中は定期的にカフ内圧及び患者の状態（呼吸・バイタルサインなど）を調べ管理すること。[カフ内の空気が膜を透過して抜けるためカフがしぼんだり、笑気が膜を透過してカフに入り込むためカフが膨らんだりすることがあるため]
20	<p>【警告】〈使用方法（カフ関連）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフを拡張するときはカフ圧計を使用し、「感覚」のみに頼ったり、あらかじめ量を測った空気を注入する方法でカフを拡張したりしないこと [適切なシールを得られないことがあるため]。 <p>【警告】〈使用方法（カフ関連）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフ圧計でカフ内圧を定期的にモニタすること [カフに注入したガスの拡散によりカフ容量とカフ圧が上下する危険性があるため]。 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフ圧は、カフ圧計により定期的に測定し、適正な圧（一般的な目安範囲としては27～34cmH₂O、20～25mmHg（文献値））を維持すること。 	<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフへの空気の注入及び使用中のカフ管理は、注入した空気量や空気抵抗の感触ではなく、カフ圧計等により行うこと。チューブカフは、気管毛細血管の内圧を超えないように適正な圧に管理すること。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフ内圧は、定期的にカフ圧計を用いて管理すること。推奨頻度は1日3回以上。
21	<p>【警告】〈使用方法（カフ関連）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフ使用に関し、以下のことを厳守すること。カフに異常が認められた場合は使用しないこと [カフ破裂・収縮、気管・気管支損傷、気道遮断など患者の傷害や死につながるカフ変形を起こす可能性があるため]。 カフを過剰に拡張しないこと。カフ圧は常にモニタリングし、動脈毛細血管の灌流圧を超えないようにすること（主要文献1参照）。 	<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフは、気管毛細血管の内圧を超えないように、適正な圧に管理すること。又は、臨床の状況により、気管をシールできる最小限の空気注入量により管理すること。[カフへの過剰な空気注入はカフ破損や気管損傷・壊死の原因になるため。] 		

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
22		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 空気の漏れや誤嚥を防ぐのに必要最低限の量の空気を入れて膨らませること。[膨らみすぎたカフは、気管粘膜の損傷や気管の変形を引き起こしたり、破損したりする恐れがあるため。] <p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 適正な圧は患者の容態にあわせて設定すること。 	<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ チューブカフは、気管毛細血管の内圧を超えないように適正な圧に管理すること。又は臨床の状況により、気管をシールできる最小限の空気注入量により管理すること [カフへの過剰な空気注入はカフ破損や気管損傷・壊死の原因になるため]。チューブカフ圧は、カフ圧計により定期的に適正な圧（一般的な目安範囲としては 27～34cmH₂O、20～25mmHg（文献値））を維持すること。適正な圧は患者の容態にあわせて設定すること。 	<p>【警告】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ カフに過剰な空気を入れないこと。カフ内圧は、カフ圧計を用いて管理すること。挿管中のカフ内圧の推奨範囲は 27～33hPa（20～25mmHg）。[気管の損傷や変形、カフの破損を引き起こすことがあるため]（主要文献 1）
23		<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 空気を注入・排出する際は、シールバルブにシリンジ等の先端をしっかりと押し込むこと。[シリンジ等の先端が浅い挿入では、空気を注入・排出できないことがあるため。] 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 空気を注入・排出する際は、バルブにシリンジ等の先端をしっかりと押し込むこと [シリンジ等の先端が浅い挿入では、空気を注入・排出できないことがあるため]。万が一、脱気できない事態が発生した場合は、インフレーションラインの切断又はカフの穿孔により脱気し、注意してチューブを取り除くこと。 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ カフに空気を注入・脱気する際は、ルアーバルブにシリンジ等の先端をしっかりと押し込むこと。[シリンジ等の先端の挿入が浅いと、空気を注入・脱気できないことがあるため] ■ 万が一、脱気できない事態が発生した場合には、インフレーションチューブの切断またはカフの穿孔により脱気し、注意してチューブを取り除くこと。また、清潔なシリンジを用いルアーバルブに異物を混入させないように注意すること。[ルアーバルブに異物（乾燥した体液や糸くずなど）が挟まりリークする恐れがあるため]
24	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ カフ関係：シリンジや三方活栓等の器具を、パイロットバルブに挿入したままにしないこと [カフ収縮の原因になるため] ■ ランツ：シリンジや三方活栓などの器具をランツ定圧バルブに挿入したままにしないこと [バルブが正常に機能しなくなるため] 	<p>【禁忌・禁止】〔併用医療機器〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ シールバルブに三方活栓や輸液用延長チューブ等を接続しないこと。[シールバルブが破損し、カフへの空気注入（抜去）が不能となる恐れがあるため。] 	<p>【警告】〈併用医療機器〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ シリンジや三方活栓等をパイロットバルブに長時間接続させたままにしないこと [一方弁が破損したり機能しなくなる恐れがあるため]。 	<p>【使用上の注意】〈相互作用〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ルアーバルブには三方活栓、輸液用延長チューブなどを接続しないこと。[ルアーバルブが破損する（内部のアダプタが外れる）恐れがあるため]

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
25	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフ関係：パイロットバルーンの方弁に糸屑や他の異物が入らないように管理すること。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフチューブのシールバルブに糸くずや異物が入り混まないようにするため、カフの空気出し入れ時以外はキャップをすること。その際キャップに異物や体液・消毒液がついていない事を確認すること。[異物等でシール機能を損ない空気漏れが起きる恐れがあるため。] 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフへの空気の注入には清潔な器具を使用し、パイロットバルーンの方弁は汚れないように気を付けること。カフへ空気を注入した後は、使用した器具を一方弁の接続部から速やかに取り外してダストキャップをすること。挿管の前にはカフ注入のテストを行うこと。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフへの空気注入の後、ダストキャップをはめること。[糸くずなどのゴミが一方弁の内部に挟まりリークの原因となることを防止するため]
26	<p>【警告】〈使用方法（カフ関連）〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 次の場合は、カフを必ず収縮させること（カフから空気が完全に抜かれると、シリンジが明らかに真空状態になり、チューブのパイロットバルーンが収縮状態になる）。 <ul style="list-style-type: none"> チューブの挿管時 チューブの抜管時 使用中にチューブの位置を調節する時 		<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> チューブを挿管又は抜管する前、及び位置補正を行う前には、カフから空気を完全に抜くこと [気管と気管切開孔を損傷する恐れがあるため]。 	
27		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフはときどき空気を抜いてしぼませること。[カフが気管粘膜を圧迫し続けると、気管粘膜が損傷する恐れがあるため。] 		
28		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフの空気を抜く前には必ずカフの上に貯留した液体を吸引すること。[貯留した液体が気管に流入するため。] 	<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 気管切開チューブのカフを脱気する前に、カフ上部に貯留した気管分泌物を吸引すること [カフの脱気時、肺に気管分泌物がだれ込む恐れがあるため]。 	
29		<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 万が一、脱気できない事態が発生した場合には、カフチューブの切断又はカフの穿孔により脱気し、注意してチューブを取り除くこと。 		

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
30		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 33hPa (25mmHg) 以内のカフ圧で気管壁を密閉できない場合は、カフの空気を抜き、再度カフに空気を入れる。再度行ってもできない場合は、より大きなサイズの本品を用意すること。[カフのサイズが不適切か、あるいはカフが十分に膨らんでいないため。] 		
31				<p>【警告】</p> <ul style="list-style-type: none"> カフ内圧を管理する時には、パイロットバルーンおよびインフレーションチューブ等に液体が溜まっていないことを確認すること。[カフ内圧を正しく測定できないことがあるため] <p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフ内圧を管理する時、パイロットバルーンおよびインフレーションチューブ等に液体が溜まっている場合は、必要に応じ気管切開チューブを新品に交換すること。[カフ内圧を正しく測定できないことがあるため]
32				<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> カフ内圧の低下が大きくなった場合、リークの可能性があるので、新品と交換するなどの適切な処置を行うこと。
33			<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 患者を適切に加湿すること [本品内腔の分泌物の凝固を最小限にし、気管粘膜損傷を防ぐため。] 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 挿管中は適切な加湿を行うこと。[付着した分泌物が凝固してチューブ内腔を閉塞するおそれがあるため]

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
34		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 本体内側に付着した分泌物等による汚れを取り除くため、適宜本体内側を吸引すること。[本体内側に分泌物等が固着し、十分な換気量が得られない可能性があるため。] 	<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 定期的に分泌物の吸引を行い、患者の気道を確保すること。チューブが閉塞していか絶えず監視し、必要に応じてチューブを交換すること。カフ付気管切開チューブの使用時に分泌物の吸引操作を行った場合は、吸引操作終了後にカフ内圧及び呼吸管理状態が適切であることを再度確認すること。 	
35			<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サクションラインによる吸引を行っている状況においても、定期的に気管支鏡等による気管内吸引及び口腔内洗浄を行うこと。 	
36				<p>【操作方法に関連する使用上の注意】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 吸引カテーテルによる吸引を行うときは窓から吸引カテーテルが飛び出さないようにすること。[気管壁を傷つけることがあるため]
37				<p>【警告】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 吸引ラインから分泌物等を吸引する時には、必要最小限の吸引圧で行うこと。[気管後壁の膜様部が本品の吸引穴に吸い込まれて損傷することがあるため]
38			<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 注意 吸引圧は40kPa（300mmHg）以下に設定すること [高圧によりサクションラインが扁平化し、吸引できなくなる恐れがあるため]。 	
39			<p>【警告】〈使用方法〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ カフを脱気した状態で、カフ上部のフラッシュ洗浄を行わないこと [洗浄液が気道下部にだれ込むため]。 	
40		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 必要に応じて、カフの上に貯留した分泌物等の液体を吸引チューブから吸引すること。[貯留した液体が気管に流入するのを防止するため。] 		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 必要に応じて分泌物を必要最小限の圧で吸引すること。[カフ上部にたまった分泌物などが肺にたれ込むため]

No.	製品 A	製品 B	製品 C	製品 D
41		<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 吸引チューブからの持続的吸引は行わないこと。[気管内に唾液を引き込む原因となるため。] 		
42		<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ カフは、収縮した際に可能な限り細く凸部がないようにすること。[挿管の際、切開孔及び気道粘膜が損傷する恐れがあるため。] 		
43				<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 吸引時に抵抗を感じた場合は吸引ラインに空気または滅菌生理食塩水等を通すことで改善される場合がある。ただし窓付の気管切開チューブの吸引ラインを滅菌生理食塩水で洗浄する場合は窓から肺へのたれ込みを軽減するためコルゲート内カニューレを併用すること。
44				<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 気管粘膜が吸引穴に吸い込まれて損傷することがないように気管支ファイバーなどで適宜、確認すること。
45				<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 吸引できない場合はカフ上部の吸引穴が気管粘膜で塞がっていることがある。一度吸引圧を開放し、カニューレの位置を変える、もしくは患者の体位を変換する、再度低い吸引圧から吸引し直すなどの対処で吸引が可能になることがある。
46			<p>【使用上の注意】〈重要な基本的注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ サクションラインからの吸引が終了したら、吸引に使用した器具（コントロールバルブを含む）は取り外し、サクションラインにはキャップをすること [感染の恐れがあるため]。 	<p>【操作方法又は使用方法等】〈操作方法に関連する使用上の注意〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 分泌物の吸引の後、ダストキャップをはめること。[落差などにより分泌物が自然に流れ出す場合があるため]